
異世界からの誘い

ネーミングセンスなしたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界からの誘い

【Nコード】

N5314Z

【作者名】

ネーミングセンスなしたろう

【あらすじ】

異世界に召喚されてしまった現役高校生の男、なかむら中村 そういちろう総一郎。しかし、ハーレムもない、字は読めなくなる、勇者にもなれない、魔法は使える！女の子にはもてない。ごく普通の青年が異世界に飛ばされるお話。

ファンタジーには素人の筆者が描く。エセふぁんたじー！
暇つぶしになっただけ嬉しいですよ。

次元の移動と出会い（前書き）

この小説には出血などの表現があり、不快になるかもしれません。そういう表現が嫌い、苦手な方は戻るをクリック！

俺の服装がおかしいというような目で見てくる。

「あの〜ここから聖神町にはどのように行けばいいですか？」
相手は首をかしげている。

「それってどこですか？」

これには驚いた。聖神町とは少なくとも県内では一番有名な町だと思っていたが知らないようだ。てか有名だろ。

「ああ、なら近くの町はどこですか？」仕方がないので交番に頼るかと思つて、聞いてみた。

「はい、ここからだと南東に30分ほど進みますとありますよ」
笑顔が眩しい。

「な、南東？」

今は方位磁針なんか持っているはずがないので分からない。

困っている俺を見て、その人は提案してくれた。

「ああ、この野草集めが終わるのを待つてくれるのなら案内します

「よ

「いいのですか？」

こう言われたらもうすっかり送ってもらつ気マンマンだが一応、聞く。

返事は笑顔でOKだ。

「はい、私もそこに住んでいますので」

「ありがとうございます、あつ手伝いますよ！どれを集めたらよいのですか？」

「なら…コレです。お願いします。」

そういつて差し出された草は青い、見たことがない草だ。

「ほう〜なかなか綺麗ですな」

正直な感想だ。

「ハハツ！何を言ってるんですか？ただの薬草ですよ？」

笑いながらまるで俺がジョーダンを言ってるようにいつてくる。

「薬草ですか、これが…薬剤師か何かをやってるんですか？」

「違いますよ、商品ですよ道具屋の」

「ああ、なるほどコレが売れるんですか!？」

半信半疑で聞いてみる。確かに綺麗だが飾りに使えるというほどでもない。しかし、草にはどんな価値があるかわからないな。

「ええ、初心者でも使えるので冒険者の方々が…知らないんですか!？」

「え!?!知りませんけど…!？」

「あなた、何なのですか!？」

いやいや、そんな格好のあなたに言われたくないよ!?!口には出さない。

「オウオウ!!!ここは誰の縄張りか分かって入ってきてるんだろ
うなあ!?!」

ガラの悪そうなてか盗賊的な格好の奴が来る。

また、RPGのゲーム風な格好だ。

「おお、コイツは頂くぜ」

そう言って、薬草の入った籠を奪う。

「え、あ…あのそれは、薬草と商品が…それがないと困ります
この台詞で俺の耳と善心がピクリと動く。」

「ああ?文句あんのか!?!」

そう言って、男は女性に近づく。

「なんなら、身体でもいいんだぜ?」

そう言って、彼女の身体に男は触ろうとする。俺が動く。

横から男の腕を掴む。力を込める。

「いつてーな、何だお前？」

「それを返して、失せろ！！！」勢いはないが精一杯、睨みながら言う。

「おう、文句あるなら殺すぞ」男はそう言って、剣を抜いて、こちらに構える。

「それ：本物か？」こんな時に小ばかにしたような口調で言うのは無謀だが何も考えずに言う。

「舐めんなよ」そう言って、斬りかかってくる。慌てて避ける。

身体が軽い。その後の連撃もかわす。

「借りますね」

そう言って、彼女から剣を拝借する。

剣道は一日体験レッスンをしたことがあるだけだが…

敵は走って斬りかかってくる。それをかわして、もう一撃来る前に抜刀と共に斬る。

男は腹から血を流す。間が空く。男は崩れた。

その時、男を中心に地面に何か光る円と文字が描かれる。

「危ない！！！」悲鳴に近い声で女性が叫ぶ。

【フレイム・ニードル・レイン】

空から様々な色の光る棒が何本も降ってくる。

咄嗟に頭を手で覆う。が腕の隙間から俺の上に丸い白い円盤の光が見えた。

【マジック・シールド】

その円盤が防いでくれた。女性の周りにも何かの儀式の陣のようなものがあつた。

「ありが…」ありがとうと叫ぼうとしたが彼女の上から先ほどの棒が接近していた。頭より先に身体が動いていた。彼女のところに駆けて行き、庇う。

棒は俺の背中に刺さったのか熱を背中から感じる。

吐血をする。彼女が無事なのを確認し、傷口を見る。おびたらしい血の量だ。

心が折れて、

そのまま、意識が遠のいていった。

2 話目にしての襲撃（前書き）

文で変なところなどありましたら、是非教えてください。
国語は苦手なので…。

2 話目にしての襲撃

気が付くと、ベッドで寝ていた。

が自室ではない。ボーッと状況を飲み込めずにいると森の女性が入ってきた。

「あっ気がつきましたか!」

そう言って、さっきと違う、今度は白い布の服を着た彼女はベッドの横に立つ。

「ここ…は?」尋ねる。

「リトル・グラウンドです。」

…ダメだ。聞いたことない。てか外国か?外国なのか?確かにこの人やさっきの人(賊)はヨーロッパ風だったな。

「ここはなんて国?」

「ジニアサウス王国です」

…聞いたこともない。

「ご両親のどちらかが日本人ですか?」質問を変えて、聞いてみると思わぬ返事が…。

「はい?日本人とは?」

本当に知らないようだ…

「JAPANESE!!!OK!?!」

彼女はビクツとする。OKではないな…。必死に言うが本当に知らないようだ。

…待てよ。さっきの光は何だった？いろいろ考えていると彼女は言う。

「あっ水、飲みます？」

そつえば喉も渴いていたな。遠慮なくもらうことにした。

「わかりました」そう言つて、手を掲げる。何かと思つてみていると手から光が出て円盤を作る。そこからベッドの横に置いてあつたコップに青い光が流れると水が溜まつていった。

「どうぞ」とコップを差し出してくるが啞然とする俺。

「ああ、うん。ありがとう」

一口、普通の水だ…。

「もしかして…失礼ですが魔法を知らないのですか？」

「魔法？」

魔法とは…ゲームとかの奴か？なぜそんな事が出来るのだろうか？

「あなたは何なの？」

「へ？」

「森に急に現れたかと思つたら常識を一切知らないし」

ここは俺が住んでいた世界じゃないのか？このような疑問が沸いてくる。さっきの魔法といい、服といい、俺の住んでいた世界とは違うように感じる。

「俺は…紹介、まだでしたね。中村…なかむら総一郎そういちろうです。あなたは？」

「私はリラです」

やっぱり、名前も違う感じだな…。

「変わった名前ですね…」

「そうか？そつだよね？うん」
とりあえず…こちらの世界では都合が悪いかも…。少し考える。
そして…決める。

「う、うくん、何か使える名前を考えて！」

これには驚いたようだ。・・当然だけどね。が冷静に応じてくれた。

「じゃ、じゃアルス・セルシアなんてどうですか？」

「ルス・セルシア？」

ついにファンタジーっぽい名前まで手に入れてしまった。結構いいな〜と思いつながらガッツポーズをする。

「セルシアさん？」

「さんはいらぬよ。」

見たところ歳はそんなに違わぬわけではなさそうだし。

「ああ、俺は日本というところから来たんだ。言語が同じで助かったよ」

「ええ！？言語は世界でこのムニラ語に統一されたのでは？」

驚いている。こつちの常識はまったくくないな…。てか日本語そんな呼び方の上、統一されてんだいいな〜。永住しようかな？無論、冗談だが。

社会勉強が必要そうなので頼む。

「リラさん、町を案内してくれない？」

「え…あ、はい」

そのまま、町を案内してもらつことにする。

今、俺らは古いヨーロッパの町を歩いている。

リラが中でも立派な建物を指差して言う。

「あれが主に治安維持活動をする、ゼルリメス騎士団です。」

「騎士団かあ〜」建物の前には青い制服のようなを着た人が二人いた。腰にはレイピアらしきものがある。（剣かもしれないが）

「あちらが市場ですよ〜！」

そこには多くの人が露店を出して、買い物客などで賑わっていた。

「すごい!!!」俺の正直な感想がついこぼれる。

元の世界にはないような商品が数多くある。

魔力が込められた宝石や変わった食べ物や服「コスプレみたいな」などが沢山あって、興味を引いた。

「にーちゃん!!!どうだい？ファルコンの肉だよ！15ギルだよ!!!」

感じの良い店のおじさんが声をかけてくる。

欲しいが金がない。諦めようとした時、リラが言う。

「二つください」

「まいどあり!!!」

そして、リラは銅貨を渡して、商品を受け取る。

「これは森でのお礼」そう言って、一つくれた。

「ありがとな」受け取って食べてみる。とても美味しい。

「旨いな...」

「そうですね」

歩きながら食べる。こちらの世界は食い物も美味しいな。新たな発見をした。

そして、歩いていると広場に出た。

「ここはオードラン広場です。」

「それは人名？」

「そうです。ドラゴン種のドラゴンがオーと云う人によって捕獲されたのがここだからです。」

「ほうほう」

この世界にはドラゴンもいるのか…。

「見てください！ちょうどショーが始まりますよ！」

すると空に巨大な魔方阵が現れる。（リラに円盤ではなく、魔方阵だと先ほど指摘された）

そこから炎を吐き出す竜が現れる。翼をはばたいて、飛んでいる。

「ギョルルル」

俺とリラの真上を飛ぶ。風が舞う。かつけー！！

そこに再び、別な魔方阵、そっちからは巨大な男が出てくる。剣と盾を構えて、ドラゴンに立ち向かう。

ドラゴン、火を吐く。男は盾で炎を防いでやり過ごす。炎が止むと剣から稲妻が出てきて、ドラゴンの動きを止める。

男は接近して、その首を斬ろうとする。しかし、ドラゴンは炎を吐く。

だが男は炎が直撃しても立ち向かって行く。そして、ドラゴンの胴体を通つ二つ。ドラゴンは霧のように消える。同時に男も倒れる。

「コレがその伝説です。」

「リラが言う。」

「そうです」

広場の中央には男の像があった。近づいて見てみる。そこには屈強そうな身体の男であった。

その時、広場がざわつく。人々は広場の出口に走る。只事ではないようだ。

「逃げましょう!」リラも慌てて、俺を連れて、広場から出ようとする。

素直に応じて、走りながら聞く。

「何があったの!?!」

「魔力です。しかも悪魔の類による魔力を感じました。」

「悪魔?」そんなのもいるのか…。

その時、左後方からは女の子の泣き声が聞こえた。そして、右前方には母親が子を探しているのが見える。

「悪い、先に行ってくれ。」リラにそう伝えて、女の子の所に人混みを掻き分けていく。

「おかさあくん!!!」と叫びながら、歩いていた。近づいて言う。

「こつちだよ」そう言って、抱きかかえて、母親の所に連れて行く。

母親の元に行くと、子供の名前を言って、近づいてくる。母親は子供を抱くと、お礼を言って、走って逃げる。

出口は人でいっぱいだが広場はガラガラになった。

その時、俺の前に黒い光が現れる。そして、二人の漆黒のローブを着た男が現れる。

「コイツか?」片方が言う。

「コイツですねー、間違えないですよ!」

俺か?俺なのか?

「サクツと殺しましょうよ!」

「そつだな…!」

そう言って、黒衣の二人はファイティングポーズをとる。

なぜこうなった。

2 話目としての襲撃（後書き）

ご意見・ご感想がありましたら、御願ひします。

勧誘（前書き）

どうも、ここまで読んでいただいている方ありがとうございます。

最初に言い忘れましたが更新が遅くなることはあっても、更新をやめることはありませんので…。

勧誘

「待て、説明しろ！」何のことかさっぱり分からんしな。

「はあ？状況解かってんのか？俺たち、悪魔だよ？教えるか！ボケ」

青年のようにでかい奴が言う。

しかし、子供のように小さい方の黒衣の奴が言ってしまう。

「お前を我々が魔王様に新たな御身体として献上しようと呼び出したんだよ」

「ちよいつ何で言っちゃうの！？」

小さい悪魔が言ってしまったのにツツコム青年悪魔、こいつら、ホントに悪魔か？

「…か、ふざけてるな、他人様をそんなことの為に…こんなところに…」

「動くな！」

俺と黒衣の自称悪魔を名乗る二人を遮るように騎士団が現れる。

「君、大丈夫か？」

騎士団の男が俺に言う。リラが横で騎士団の男に守られながらこちらを見ていた。

俺がリラに視線をやると、悪魔の小さいほうが動き出す。

リラたちの方に向う。何をするつもりかと思っただが騎士団たちをこれ以上、こちらに来させないために対峙して、見張るだけのようにだ。

一方、青年悪魔のほうはこちらに飛んで来る。

速いので飛んでる！とかと突っ込む暇もない。

騎士団の男は腕を斬ろうとしたが黒衣の男は腕を黒い霧状にすると剣では斬れなかった。そして、黒衣の男は騎士団の男の顔に触れる。すると、

「がぼぼ…」

騎士団の男は口から泡を吹いて、白目を剥いて倒れた。

そのまま、俺に向ってくる。ダメだと思ったら魔法陣が現れて、盾となつて、俺を守る。コレはリラのようだ。森で見たしな。

悪魔はリラのほうを見て、舌打ちする。

小さいほうがリラを吹っ飛ばす。騎士団、介抱に向う。

「リラ！」

ルスは叫ぶ。

そこでルスはアッパーを繰り出す。悪魔は油断したらしく、まともにくらう。

悪魔は怯む。

その隙に、ルスは騎士団の男から剣を盗る。

「よっくも、やってくれたね。人間が勝てると思うなよ！」

笑顔で言つと、殴りかかってきた。

咄嗟に剣を振る。剣は光を帯びたようにみえた。黒衣の男はさつきのように霧状にして防ごうとする。

しかし、剣が霧状の物と接触した時、黒衣の男の顔が歪む。

小さい方の黒衣の男もそれを見て、動き出す。

ルスは追撃で倒してしまおうと思ひ、青年悪魔に突っ込むが小さいほうが割り込んできて、蹴られる。

反応できず、俺は顔面を殴られて、吹っ飛ばす。

鼻血が出てしまった。

他の騎士団員も近づいて来て、援護しようとする。

俺に斬られた青年悪魔は言う。

「不味いぞ、アイツ、大物だ」

小さいほうと言う。

「なら、二人で行くぞ」

そう言うと二人の周りに黒いオーラが出る。

背筋が冷たくなる。

騎士団員たちも金縛りに遭ったかのように動かないがある男は動いた。

その男は無数の魔方陣を作り出し、魔法で攻撃する。

高速で右、後ろ、左と避けている悪魔に剣を抜いて、斬りかかる。

剣には炎が帯びていた。

青年悪魔がまたしても斬られる。今回は黒衣を切裂いていた。

黒衣の切れ端が空中を漂う。

「退くぞ」

小さい方がそう言うと、黒い光が二人を包んで消えた。

俺は崩れる、思ったより疲労感がくる。

リラが来る。

「大丈夫ですか!？」

かなり心配してくれたようだ。

「なーに、大丈夫さ」

ルスは鼻血をふき取り、強がるがづらい。そして、呟く。

「けど、目的はできた。」

「え？」

リラは気になったようだが騎士団員が来たので会話を切る。

「君、大丈夫かい？」

「お前すごいな!!!」

「悪魔を相手にまあよくも無事で」

「奴らは君を狙って来たんだね？」

「さあね？こつちが知りたいよ」

知らない振りをする。俺の勘が言わない方が良いと告げていた。というか説明しても変人だと思われるだろう。異世界から来て、襲われたなんて。

その後も質問攻めにされたが決して口を割らなかった。自分の尊厳を守るためにも！

「しゃーねえな」

その団隊の頭と思われる人物が言う。

「狙われてることは明白だ。こちらとしては近くで見張つといた方がよさそうだな…。強くなりたいか？」

「なりたいですね」

ルスは答える。

「なら、うちに入らないか？」

「え？」

「寮が付いて、飯も出て、給料ももらえるぞ！」

「入ります!!!」

一瞬で決めた。家もないしね。これで暫くは食っていけそうだ。俺はリラに言う。

「いろいろ、ありがとうね。ということでは俺は行くから。今度、お

礼しに行くね！」

リラは頷いて、帰っていった。

「お前、名前は？」

「ルス・セルシアです。」

早速、付けてもらった名を使う。

「ほう、ルスか。俺はアランだ」

団長の名前はアランか…。

そして、案内が始まる。

「ふう、疲れた」

今は自室の風呂に入った後である。かなり立派な部屋である。今日は一日、案内や職務の説明があったのだ。契約とかもね。

明日も早いので休む。

騎士団生活（前書き）

何か、悪い点があったらご感想お願いします。

騎士団生活

森での魔法で刺された跡もすっかり直っていた。

この騎士団に入って、既に一週間が経った。

あれから、悪魔たちの襲撃はなかった。理由なんぞ知らないがな。

「集中しろ！」

俺は何故か、隊長様から直々に指導を受けていた。今は剣術の訓練で騎士団員と剣を交えていた。

「はあはあ、イエス・サー！」

とりあえず、テキストに返事はする。疲れて、返事をする余裕がない。

団員はまったく疲れていないといった様子で打ち込んでくる。訓練

の初めにドンドン打ち込んでいたのが懐かしい。

「はあはあ、しぶといな……」

「ほら、来いよ」

団員の方が挑発をかけてくる。

誘いに乗って、突っ込む。剣を振り、その面を斬ろうとするが剣で防がれる。足で相手の足を引っ掛けて、転ばせる。

「うおっ」

足払いをされて、転ぶ。

「気を抜くな……！」

隊長に怒られる。

「イエス・サー」

俺の強みは粘り強さだ。今まで勉強でもスポーツでも生かせなかったが……。今こそ使うときだ。
走って、近づいて、斬る。
弾かれたので距離を取る。

また走って、近づく。今度は向こうが斬ってきた。
それを背後に跳ぶことで避ける。

一気に近づいて、連続で攻撃する。上半身を中心に狙う。全て、避けるか弾かれたが急に足を狙うと防げずに倒れた。
倒れたところに馬乗りになって、剣を首に向ける。

「どうですか？」
隊長のほうを見る。

タバコをくわえて、魔法で火をつけながら言う。
「だから、気を抜くなって」
そう言われた瞬間、視界が逆さまになって、気がつくと馬乗りになれ、逆になっていた。

「今日はこちらまでだ」
そう言って、隊長は立ち上がる。

「ありがとうございます」
相手をしてくれた人に言う。
「なあに、楽しかったぞ」
そう言って、笑っていた。

隊長が訓練部屋から出る。俺も付いて行く。

「次は魔法ですか？」
「そうだ、さっさと来い。」

「イエス・サー」

魔法の練習は基本外で行う。建物を軽く、消してしまうような事故もぎらではないからだ。

先日健康診断をした時に俺にも魔力があることがわかった。だからこうして魔法の訓練もしている。

魔力を持つ者には三種類あるらしい。

魔方阵を使つて、強力な魔法を使う者。基本、どんな魔法も使えて、自分で魔方阵を書き換えることによって、作り変えることもできる。もう一つは魔力を魔方阵を使わずに直接放出するもの。これは攻撃魔法しかない。

最後はこの二つ、両方を使えるものだ。かなりレアらしい。

俺はこの最後の奴に属する。

それぞれ、欠点も長所もあるが忘れた。

「ふっ」

手を合わせて、集中する。

今やっているのは回復の魔法だ。

小さい魔方阵を作り出す。

青い光を放っている。属性が水の魔法だから青い光だ。

魔方阵の中心から光が出て、回復対象を光で包めば成功だ。しかし、魔方阵から光が出る前に魔方阵は消えてしまった。

「練習しろよ」

「攻撃は得意ですよ！」

そうやって、片手を空に向けて、片手に魔力を集中させる。

そして、発射！この前、一人で練習したときと同じく金色の光線が飛ぶ。空ではじけて消える。

花火のように美しい。

「ほう、こっちは簡単だからな」

「そうなのですか？」

「がっかりする。」

「まあ、そう肩を落とすな。魔力はかなり強いぞ」

「そうですか？」

「ああ」

少し嬉しくなる。褒められるのは珍しいから。

「おい、回復魔法も使えないんじゃないぞ期待はずれだな」

うっ 確かに回復魔法は使えないと…。

「練習します…」

「おう、頑張れ」

そして、隊長は寝転んで雑誌を読む。

一時間後、これで数十個目となった魔法陣が俺を中心に地面に現れる。

サイズはちやぶ台ぐらいまで大きくなった。

そして、術も最後の光の発生まできた。

あとは光が俺を包むだけだ。

光は空中を浮いて、俺に近づく。そして、頭のところに来ると弾けて、俺を包み込む。

「こ、これは…」

「おめでとう、成功だ」

隊長はともに喜んでくれる。俺も嬉しい。

ついに、魔法を体得した。

「やった！」

「だがどんな状態でも使える状態になるまでこの練習な」

がっかりする。いい加減、飽きてきたところだ。

それを言つと…。

「バカヤロー、この魔法が全ての基礎となるんだよ！そのうち分かるから大人しく続ける！」

「イエス・サー」

そこに団員が入ってくる。

「なんだエリック？」

「隊長、ルスの見廻りの時間です」

「おお、そうか。行ってこい！」

「イエス・サー！」

そう言つて、町にエリックと出て行く。慣れないうちは誰かとコンビを組んで、勤務だそうだ。

そして、町では暴動が起きていた。

パトロール

事件は広場で起きていた。

エリックは一番後ろにいる野次馬に聞く。

「何があつた？」

「ここからでは分かりませんが女性と男が揉めてるらしいです」

それを聞いて、俺らは人混みを掻き分けて前に向う。

「騎士団だ、退いてくれ！失礼！」

やっとの思いで最前列に来る。

大声で男と女が喧嘩をしていた。

「このつツケを払いなさい！」

女性が大声で言う。

「あ？いいだろ、別にこつちは客だぞ？」

男も負けじと大声で言う。

「いいわけないでしょ！今日の分もまとめて払いなさい！」

どうやら、男がツケを払わずにいて、今日の分も払わずに店を出ようとして。この女の人がキレたらしい。

「うつせなー！」

ついに男は殴りかかる。女性は手で頭を守る。しかし、拳は女性に当たることはなかった。

エリックが男の拳を掴んでしまったからだ。

「なんだ？おい、放せ……」

男はエリックの制服を見ると言葉を失う。

「落ち着いてもらおうか、騎士団だ」

エリックが言う。

「げっ！」

そして、男は逃げようとするが俺が行く手を阻む。

「逃げるなよ」

俺は剣を男にむけて言う。

「ご同行願います」

エリックはそう言って、仲間を呼んでくる。その間に俺は女性から詳しい話を聞く。

あとは別の団員が来たのでその人たちに任せる。

騎士団はこのように警察のような治安維持活動も行う。

元々、警官を目指していたのでこれは天職のようなものだ。

そして、パトロールを続行する。

歩いて、辺りを見回りながら話す。

「今日は事件も少ないですね」

「ああ、近々、王子の魔王討伐の旅があり、その為にパレードがあるから城の直属の兵がいろいろ、してるからな……」

「へ？魔王の討伐に王子が行くんですか？」

それを知らないのに驚いたようだ。…仕方ないだろ。まだ一週間目だし。

「王族は魔力が一般人よりも高く、属性も光、魔王には相性がいいからな。」

「そうなのか」

「今度、王子の供を決めるために武道大会があると噂がたってるじ

やないか」

そういえば、言ってたな…天下一武道会のようなものだったか
違ったようだ。

「え？となると…うちからも参加するのですか？」

「もちろんだ、近々、参加者が発表されるぞ」

これは…参加して、付いて行けば、魔王にあって、帰ることができ
るのでは！？

思わぬチャンスの到来！！

「エリック先輩、スイマセン、用事を思い出しました。後、お願い
します。」

そう言っつて、町の外に向う。

「おお、やる気じゃないか。有望だな。」

そう言っつて、エリックはパトロールを続ける。

一方、俺は最初の森に来ていた。

魔法の本を傍らに置いて、魔方阵を作っていた。

「ふっ、くくくく…」

気合を入れて、集中する。

魔方阵は現れたが形が崩れて、消えてしまった。

今のは、肉体を強化するという魔法であったが難しい。

「この本…よめねーや。」

本は持ってきたがよく考えたら、読むことができなかった。以前に
隊長に訳を教えてもらったところだが、ここだけでは足りない。

その時、背後から物音がした。

振り返ると、そこにはリラがいた。

「こんにちは」

「おお、ひさしぶり！」

「魔法を使えるの？」

「いや、まだ初級の回復しか使えないけど。」

「だったらその練習をしないと……」

隊長と同じことを言う。

「やっぱり、基本になつてくるの？」

「そうね、そこをおろそかにすると、後々、魔法の形成速度を上げるためにも練習するべきよ。」

練習を変えて、速度などを重視してみる。

「そうそう、ああつ惜しいです！」

魔法陣がまた崩れる。しかし、形成速度は上がってきていた。リラが指導をしてくれている。

「集中力がないみたいですね……」

それはよく、隊長に言われるのでわかっている。

「心を無にするような感じで……」

心を無にと言われても……分かるはずがない。

「見本、見せますね」

そう言うと、空気が変わる。空気がピリピリして、集中を邪魔できないと思うぐらいになるが驚くほど静かな感じだ。周りで騒いでいた動物も静かになる。

「……」

啞然、俺は何も言えなかった。

空気が元に戻り、動物の声も聞こえ始める。

「すごいな」

「そうですか？」

いや、神の為す技みたいだから。

「魔法使いはこんな事ができるのか？」

「うーん、どうかな、私の行ってた魔法学院では先生を除くと出来たのは私を含む、上レベルの人たちかな？」

「そんなにすごかったなんて！」

ぶつちやけ、町娘Aぐらいだと思っていたが…予想外だ。

「あなたの方がすごいわよ？」

「へ？」

まったく、理由がわからない。

「さ、練習の続きを…隊長さんにも頼まれてるから。」

「え？隊長が？」

「あなたを鍛えてやれとのことですよ。」

いつの間に…よくサボって、練習してるのが分かったな…。

魔法に関しては一流の師に出会い、本当の修行が始まる。

油断大敵（前書き）

遅くなりました。

ええ、実はまだ学校があるので冬休みではないのですよW W

と、いうことで暇が少ないので遅れました。

ということにしておきます。…言い訳です。

ではお楽しみください。

油断大敵

この世界に来て、二週間が経った。

現在、俺の所属している騎士団の俺を含む五人は来月の武道大会に備えて訓練をしていた。

なぜ、俺も入っているかということ…数日前に遡る。

3日前 会議室

「え、皆も知ってるの通り、来月に勇者の供を務める者を選ぶための武道大会がある。」

隊長が言う。団員たちはそれを聞いてざわざわと互いに話す。中には賭けをしている者もいる。

日本とは違って賭け事は違法ではないが…。

「これから、出場するメンバーを発表する。」

そして、メンバーを発表していく。

「まずは俺だ。」

コレには反論するものがない。隊長の強さは桁違いだ。訓練でエリック先輩（一応、4本の指には入るくらい強い。）が瞬殺されていた。

次はエリックと次々、選ばれて、ついに最後の一人だ。

もう、諦めていたが俺は見事、選ばれたのだ。

その時、他のメンバーは不思議そうな顔をしていた。俺も同じ気持ちだ。まだまだ、強い人はいる。

「じゃあ、訓練怠るなよ。」

隊長はそう言っつて、会議室を去る。これで朝礼は終了だ。

短いがこんな感じだ。

さて

今日もリラを誘って森で魔法の練習だ。

剣術も必要だが…隊長命令でここ最近魔法漬けだ。

だが魔法もおかげで回復についてはそこら辺の人には負けにくいぐらいにはなった。…レベルは最低だが。

「次は…この攻撃魔法を…」

「やったZE！」

ついに待ち望んでいた攻撃魔法の練習。

「長かった…」

「筋はよかったですよ、このレベルに来るの早いです。」

リラが言う。しかし、長かったよ。ホント、ドラOE、FOのようにポンポン覚えることができないからな。

「じゃ、コレを…」

俺は本を見るがやはり、字は読めない。だから説明をしてもらう。字は習ったから少しだけ読めるがダメだ。火としか読めない。

「これは火の玉を投げつけて攻撃する呪文です」
うくんメOやファOアみたいな魔法か。

早速、魔方阵を作ってみる。

初めて、魔法の練習をした時は魔方阵も作れなかったが今回は一発だ。

「おお？」

そして、魔方阵からは火が出てくる。やった本人も驚く。

「言ったでしょ？そのうち分かる…」

どうやら、今までの練習が役に立ったようだ。

そこから練習をして、初級の雷、地、火、水と覚えていく。

「ふう」

「飲み込み、早いですね」

照れる素振りをする。

「まあね」

「じゃ、休みにしましょう」

休憩に入る。

「隊長がなぜ俺を選んだか分かんないんだよなあ」

リラに聞けば分かるかもしれないのでこのように言ってみる。

「それは…、貴方が光の属性を使えるからです」

「え？それって、王族しか使えない属性じゃないの？」

「けど、貴方は王族でない。けど使える。」

「そうなのか…」

あの時、剣が光っていたのも勘違いではないようだ。

「光は闇を使う、悪魔には有利だから選ばれたのです。」
「なるほど」

「けど、人前でそれを使っではいけません」

「え？何で？」

コレには呆れたように答えられる。曰く。

「光の魔法は王族しか使えないのに貴方が使えたらおかしいと目を付けられて、何をされるかわかんないでしょ！？」
と嚴重注意された。

そして、隊長がリラに魔法を教えるように言ったのもこの為だろう。
「リラ、話すよ…俺はこの世界の人ではないんだ」

「え？」

あつ驚いてる？いや、引いてるのか？

「分かってますよ、今更ですね。」

「はあ？何で？」

まさか分かっていたとは…

「常識も知らないし、こんな所にいたのはおかしいですよ」
確かにそうだな…こんな森でフラフラしてたら変だよな。

自分では思ってたなかったけどね！

そこでリラが何かを感じ取ったようだ。周りを見渡す。俺もそれを見て、辺りを警戒する。

「どうしたの？」

「微量の魔力を感じます」

「この前の広場で襲ってきた悪魔か？」

「いえ、悪魔というより魔物ですね」

「魔物？」

これはまだ、聞いていなかったなので聞き返す。

「魔物は悪魔と違います。悪魔は魔物を従える存在です。格が違います。中には魔物の方が地位の高いこともあります。」

「その魔物がここに？」

「そうです」

その時、茂みから鳥が飛んできた。コレは…？

「スパルナです。あの鳥は翼が綺麗ですから高額で取引されてます。」
「ほう、金になるのか」

俺は魔方陣を作り出す。そこから火の玉を出す。玉は真っ直ぐスパルナに向って飛んでいく。

あっけなく倒れた。俺はすかさず、翼を剥ぎ取る。

「弱いな…」

「冒険者の初心者が狩るような魔物ですから…」

ああ、やっぱり、かなり弱かったしな…。

「それでも…高額なのか？」

「はい、ルスさんの給料の倍以上です。」

「…え？なんでそんなに高いの？」

ショックだ。初給料があんな弱いものよりもしたの価値だなんて。そして、返ってきた理由は…。

「レアだからです。」

きっぱりと言う。

「な、なるほ…」

最後の1語は言えなかった。

油断しているとまた草むらから出てきたスパルナに頭に体当たりされたからだ。

頭から出血。意識がもうろうとする。リラが一瞬でスパルナを燃やしてしまったのを見て、俺は自分の回復をするために魔方陣を出す。しかし、意識が途切れてしまい、そのまま、倒れる。意識をうしなってしまう。

油断大敵（後書き）

ご感想、ご意見などございましたら
是非、御願います。

ショッピング！(前書き)

ぜんぜん、ショッピングではないです

シヨッピンゲ！

意識が戻ると寮にいた。

うむ、どうやら、また、倒れてしまったようだ。

その後、隊長に会議室に呼ばれた。

<会議室>

「バカモン！！リラに迷惑をかけるとは何事だ！」

「すいません、不意打ちだったので……」

「尚更だ！ばか者！油断してやられるとは！貴様、それでも騎士団か！？」

そのまま、軽く二時間は搾られた。

廊下を歩いているとエリックに会う。

「おお、訓練はどうだ？」

「早速、やらかして、怒られました……」

「聞ってるよ、災難だったな」

「はい」

「そういえば、もう売ったのか？」

「なにが？」

「羽根だよ！羽根！」

羽根とはスバルナの羽根のことである。

そういえば……すっかり、忘れていたな。

「買い物、行こうぜ！」

古くて、実戦では使えないと思われるので、二か月分の給料ぐらいで買えた。

エリックは鍛冶屋に持っていけば、しっかり、直すことができると言っていたのでエリックの買い物に付き合った後に鍛冶屋に向う。

鍛冶屋だ。

中はめちゃくちゃ暑くて、槌を叩く音が絶えない。筋肉ムキムキの人ばかりだ。汗で光っている。

ここにもエリックがいつも仕事を頼んでいる、人がいるらしいので訪ねてみる。

「よーお、パトリック！」

「エリックか？」

「そうだぜ！今日はツレもいるんだ！」

このパトリックという人も他と同じく、筋肉が爆発しているのと歯が真っ白なのが印象的だ。…羨ましいぜ！

「どうも、パトリックです。エリックの兄です。弟がいつもお世話になってます。」

「いえ、世話になってるのこっちですから。」

エリックさんの兄にしてはちゃんとしてるなあ。などと余計なことを考えているとエリックに叩かれた。

「いったー！」

叩かれた部分をさすりながら言う。

「何をするんですか！？」と涙目で言う。

「お前…パトリックの方がちゃんとしてると思っただろ？」

「え…いや」

などと言いつつ考えている。

「ところで、今日は急に何の用だ？」

「ちょうど良く、パトリックが聞いてきたので話題が変わる。」

「ああ、コレを修理してやってほしいんだ」

そして、俺は先ほど買った剣を差し出す。

「これは…ガンソード？」

パトリックが呟く。

「ガンソードって何ですか？」

「とりあえず、聞いてみる。」

「ああ、コレはな…初代王、つまり、異界からやってきた人間が作ったものだ」

初代王が異界から来ただと？

「其の話、詳しく、聞かせてくれ。」

俺が迫ったせいで引かれたがコレは是非知らないとならない情報だな。

「ん？まあ、詳しく？ただ、初代王が以前、住んでいた世界での武器の銃と剣、魔法を組み合わせて作った武器だ…どこで手に入れた？」

聞かれたので万屋と答えると非常に驚いていた。そして、理由が思いついたのか「貴族どもが借金なんその為に売りやがったな！」と怒っていた。

まあ、とにかく、価値があるものらしい。けど結構、安かったよな…。
エリックが時間が経って、其の価値も忘れられてしまったのだなと言っていた。

とにかく、快く、この仕事を引き受けてくれたようだ。
その後、他にもいろいろ、話を聞いたり、別な依頼をしたりする。
帰って、修行場に向うと先輩方がいた。

「よう、ルス…鍛えてやるよ」

そう言つと、一つしかない出入り口の扉が閉まり。

中にいた全員が模擬の武器を構える。

…なにかしましたか！？俺！？なぜ？なぜ？

考える間もなく、襲い掛かってくる。

とにかく、レイピアやら剣の嵐から走つて、逃れる。そして、壁に掛く剣を手に取り、壁を背にして向き直る。

そして、構えて、集中する。

「……」僅かな時でとにかく、心を落ち着かせる。

「ヒュー、ヒュー…」

深呼吸をする。…先輩方は俺をゆっくり、少しずつ困っていく。

魔方阵を出す。同時に先輩方も動く。壁を背にしてあるから後ろからの攻撃の心配はないがこの数は厄介だ。

最前列の男がレイピアで突く、剣で軌道を変える、横から今度は矢が来る。剣で弾こうとしたが前方から斬りかかってきたのでそちらを防ぐ。矢が迫る。先ほどの魔方阵を起動する。

【マジック・シールド】

魔法の盾が矢を弾く。

最初の布石をいきなり、使つてしまい、そこそこ、ピンチになる。

「ルス、これでしまいだあ！！」

そう言つて、今度は槍を持った男の突進。矢が一気に迫ってくる。

…避けきれない!!と悟った。何事もなく、帰れるとは思っていない。かつたが怪我をするのは嫌だ。そこで使ったことのない技を思いつく。

集中、矢が迫ってきている。カンマ何秒かでの集中。

矢が衝突する瞬間に魔力を体を包むようにして一気に放出！これは直接放出するほうの魔法だ。

魔力は弱めなので先輩方はせいぜい倒れるぐらいだった。

俺はその隙に逃げる。

「はあはあ、フウ」

寮の部屋に逃げ込んで一息つく。

しかし、なんで襲われたのかだろうか？

考えながら眠っていると言音が聞こえて、ビクツとなる。

どうやら、隣の部屋の人が帰ってきたらしい。

その晩は襲撃がないか、ビクビクして眠った。

（翌日）

「よう、ルス」

隊長に話しかけられて、ビクツとなる。

「隊長ですか…」

この台詞になんだよと言われるが仕事に戻る。

「んだよ、反抗期か？」

などと隊長は言いながら職務に戻っていく。

「ああ、ところで…今日は修行して、サボるなよ？」
隊長が椅子に座って、思い出したように言う。

「え！？何ですか？」

俺は慌てて、聞く。

「ああ？昨日な、隊員の3割が入院したんだよ」

…心当たりがあるような気がする。

てか絶対、俺がやったんだな…。うん、仕方ないよね。

「全員、明日には退院するだろうから、今日だけだ…」

その日は少し、責任を感じながら、仕事をする事になった。

闇に紛れる盗賊（前書き）

サブタイトルっていいのがおもいつかないです。
・・・どうすればよいのやら

闇に紛れる盗賊

先輩方が退院してからさらに一週間が経った。

あれから、パトリックさんを昨日、訪ねて、頼んでいた物を持ってきた。ガンソード以外にも武器を頼んでいたが一昨日、完成したらしい。

それはさておき、今日も仕事だ

「ルスくん、おはよう」

爽やかな笑顔で言われる。

彼は前回、ルスを襲った先輩方の槍使いの人だ。

あれから、実力が認められ、何とか孤立とかは防げたのである。

「おはよっす、先輩。」

そう答えて、一緒に本部の会議室に向う。

この先輩とここ一週間、組まされることが多いので仲も良くなってきた。

この先輩、名前はゼル・セグタイア、階級は中将ぐらいとみていいらしい。ちなみにエリックと同じ。

「失礼します」

ゼルに倣い、ルスもそう言って、中に入る。

「よーお、来たな二人とも！まあ、座れ」

隊長が上座に座っていた。

俺らは隊長の近くに座る。

「今日はどうしたのです？」

ルスが聞くと隊長は「おうおう、やる気だな」と言って、用件を話し始める。

「近々、知つての通り、武道大会があつて、世界中から人が来るだろ?」

「そうですね…それに何か問題が?」
ゼルは言う。

「おう、その中に紛れている招かれざるものを討つて欲しい。まあ、ざっくり、殺しちゃつて。」

隊長が言う。

「招かれざるもの?」

俺が聞き返すと隊長は詳細を話し始める

「ああ、そいつはな…」

隊長は間をおいて言う。

「世界でも有名な…」

ゴクリ、ゼルは生唾を飲んだ。

「盗賊団…」

「盗賊団?」

俺が聞き返す。

「そつだ、なんと盗んでいるものが…」

再び、間が空く。

「お菓子だ…」

「……え？」

「隊長、もう一度お願いします」

「ん？お菓子だ」

「……」

「隊長、帰っていいですか？」

俺が聞くと隊長は慌てて言う。

「待て待て、慌てるな。コレだけ聞くとくだらないと思うがな……」
「どうやら、まだ続きがあるようだ。」

「お菓子の為になら手段を選ばない非常な奴だ。」

「失礼します。」

俺はそう言って、会議室から出ようとするが呼び止められる。

「今回の仕事はだな…アレだぞ子供を守るためにも…な。こいつは過去に大虐殺もしている。」
「子供か…なら、仕方ないかと戻る。」

「どうも子供を守る！とかとなると弱いかな…。」

「奴から、犯行予告が来ている。」

「予告ですか？」

「おいおい、どこぞの全身真っ白の怪盗さんじゃあるまいし、なんでそんなリスクを…。」

「ただし、コイツは何回か、予告を破っている。この予告は信用できない。」

「そうですね…」
ゼルは肩を落とす。

「ただし、時間は破ったことがない、今夜に来るようだ…場所はエ
ンゼル・スイーツショップだ」 文字の間違えではない

「なるほど、ではそこに俺が行きます」
ルスは言う。

「もう一つ、張るところは…王国一と云われるスイーツ店……ス
イーツヘブンスだ。」

「なるほど、間違えなく来そうですね。」
ルスは納得する。

「この二つの店は幸い、距離が近い。片方に現れたら通信気で知ら
せてくれ。」 再び、間違えではない。

通信気とはこれまた、魔力を込めてスイッチをおして、声を出すと、
通信気を持つ、メッセージを送りたい人に声を届けることが出来る
のだ。（音は通信気から出る）

「よし、早速、現地に向ってくれ！」
隊長が言う。

「了解！」
そして、現場に向う。

現場の迎えのカフェを使い、観察。ガラスなのでよく見える。
昼間はそこでずっと、見張っている。

特に不審な人物はいない。結構、繁盛してるな……。

そして、夜になる。
店長に話して、屋根裏に入って、金庫、商品を見張る。(同じ部屋に置いてもらった)

10時ごろ、未だ現れない。

通信気に連絡が入る。

「現れた!!!今、交戦中、援護を頼む。」

「了解」

そう返して、ゼルのいる店に向う。

3分ほど走って、ようやく、たどり着くとゼルは槍を構えて、犯人と思われる男と対峙していた。

男は全身真っ白のシルクハットではなかったが…。

「先輩！」

ゼルは傷を負っていた。

「ルス！コイツ、なかなか強いぞ！」

ゼルがそういつた瞬間、男は不敵な笑みを浮かべる。

「ほう、援軍か…」

男はルスの目の前に急に現れる。

「!!!!!!」

慌てて、バックステップで距離をとる。

速い…のか？

男は何もないところから傘を取り出し、こっちに向ける。
傘から紫の光弾が飛んで来る。

咄嗟に避ける。

そして、腰からぶら下げていた物を取り出す。

ハンドガン…拳銃だ。

照準を合わせて、引き金を引く。

黒い光弾が発射される。スライドが下がる。尤も、原動力は魔力で直接、銃に吸収されるものだから関係ないが…。つまり、銃の利点である、常に同じ威力を放つことが出来ないが…。

今はどうでもいい。ドンドン発射する。男もそれを避ける。隙を突いて、銃とは逆の手にナイフを持って、突き刺す。そして、ゼロ距離で発射。

男は血反吐を吐く。
弾は貫通する。

「おい、立てよ」

今回は捕まえるのではなく、殺害が任務だった。
だから、問題ない。

ゼルが立ち上がった言う。

「さつさとしろ！ここは目に付く。」

騎士団が犯人とはいえ殺害してるのを見られたら評判が悪くなると
いう意味だろう。

ルスは男の頭に銃口を押し付けて、引き金を引く。

男は完全に息絶える。

「任務完了、引き揚げるぞ」
ゼルはそう言って、立ち去る。
ルスもそれに従う。

その時、空から人が降りてきた。
そいつは黒衣の以前に戦った悪魔だった。

「貴様を始末しに来た……」
この間の小さいほうだ。

そつちに気を取られているとゼルが倒れる。

「ゼル先輩!？」

ゼルはこの間の青年らしい悪魔に頭を地面に叩きつけられていた。

「隊長！悪魔です！」
通信気を使って、言うが応答がない。

「無駄だ…妨害させてもらっている。」
小さいほうが言う。

絶対絶命のピンチ!!!!

再び、撃退（前書き）

あけましておめでとう
今年もよろしく

再び、撃退

助けを呼ぶことのできない状況、しかも、相手は騎士団員をも圧倒する強敵。

こちらは魔力を消耗してしまっている。

悪魔はお構いなしで二人がかりで来る。

銃を使い、遠ざけようとするが避けながらもこちらにじわじわと近づいてくる。

魔力も諸費して、状況は悪くなるだけだ。

剣を抜く、前回のように刃に光は帯びていなかった。

青年のほうがりかかってくる。頭を逸らして、頭部へのパンチを避ける。剣で斬ろうとすると上から小さいほうがり降りてきて、ルスの頭を地面に叩きつける。

小さいほうがりグイグイとルスの頭を踏みつける。頭部が地面に減り込む。

「うつつぐああ」

ルスの頭に激痛が走る。

それをゼルがフラフラになりながらも槍で突いて、妨害しようとする。

その時、背後から現れた、青年悪魔がゼルの背後に現れる。青年悪魔は右手を掲げる。すると魔力が集まり、手が刃物のようになった。それでゼルを斬りつける。

ゼルは間一髪、首を傾けて、避ける。しかし、青年悪魔により、追撃。ゼルはひたすら、動いて、攻撃をかわしていく。

ルス、小さい悪魔の足を掴んで、足を退ける。そして、立ち上がり、顔面にパンチを食らわせて、魔方陣を小さい悪魔の顔面のゼロ距離

の位置に作る。

炎が小さい悪魔の頭に燃え盛る。小さい悪魔は頭を押さえて、苦しんでいる。

しかし、小さい悪魔が闇を頭に包むと炎は消えてしまった。

ルスは剣を八相に構える。

「来いよ」

小さい悪魔の攻撃を誘う。悪魔は走って、こちらに向ってきた。

そこを袈裟斬り。悪魔は避ける。ルスは跳躍して、悪魔の目の前に降り立つ。逆袈斬り。小さい悪魔の肩を掠る。

黒い血が悪魔の肩から噴出す。

一方、ゼルは青年悪魔により、全身に斬り傷を負っていた。

「グッ」

ゼルは呻く。全身から血が出ている。

しかし、ゼルは戦わねばならない。槍を握りなおす、青年悪魔の胸を突く。しかし、悪魔も体を逸らして避ける。ゼルは横薙ぎに払う。槍が青年悪魔に叩きつけられる。

ルスが横から青年悪魔にジャンプ斬り。

青年悪魔は硬化した手で防ぐ。

ゼルに退避するように伝える。

ゼルが退避する。ルスも魔方阵を展開、強烈な光が出る。

悪魔たちの眼が眩む。

その隙にルスも逃げる。

走っていると通信気が鳴る。

「応答しろ！」

隊長の声が聞こえる。

「ルスです！悪魔が出現、場所はDブロック！」

「わかった、パン屋の近くだな！大至急で応援を送る」

「了解」

そう言つて、通信を終える。背後から足音が聞こえる。振り向いて、剣を構えるとゼルだ。

「無事か！？」

ゼルが聞いてくる。

「ああ、大丈夫だ」

来るぞ、青年悪魔のほうがちらに向つて、走ってきていた。どうやら二手に分かれたようだ。

今は大チャンスだ。こちらは二人だ。

悪魔が来たところにルスが斬りつける。避けられる。更に、ゼルが槍を構えて、突進。避けた先に突っ込んでいく。

全て、避けられる。倒せずにいると小さい悪魔もやってくる。

「早くも着ちまったな」

ゼルが残念そうに言う。

「いや？こつちもだ……」

ルスが言う……大量の魔法陣が悪魔の頭上に出現。様々な属性の光弾が悪魔に降り注ぐ。

悪魔たちは一撃目は当たってくれたが後は全て、避けていた。ルスは手に魔力を集めて、それを光線で悪魔に放つ。悪魔は闇で体を包み込んで防ぐ。

そこにゼルが槍を投げつける。闇に突き刺さる。そこに隊長が現れて、刺さった槍を蹴つて、闇に深く突き刺す。

そこにゼルと隊長は魔方阵をそれぞれ作り出す。
そして、槍に炎を発射する。

炎が闇を包む。炎が晴れると悪魔はいなくなっていた。

「逃げたか！」

隊長が言う。

「二度目か……」

「うぐっ」

ゼルが倒れる。血が大量に流れたので貧血かもしれない。とにかく、ルスと隊長で本部に運ぶ。途中から応援部隊がやってきたのでゼルをまかせる。

「どうやら、奴らは待ってくれねーらしいな！明日からまた俺が稽古をつけてやる！」

隊長が言う。

「ご指導お願いします……」

ルスは言う。

これ以上、周りの者をまきこまれてたまるか！

そして、また通信気になる。

これはパトリックさんからだ。

件名にはガンソードが完成したとあった。

材料は揃った、覚えているよ……悪魔め！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5314z/>

異世界からの誘い

2012年1月1日00時49分発行